20 山水之図　野村文挙　一幅

絹本着色
明治時代後期（二十世紀）
本紙一六四・三×八六・七

野村文挙（一八五四～一九一一）は、京都の呉服屋に生まれた。初め梅川東挙について浮世絵を学んだが、のちに塩川文麟に入門し、さらに文麟が没してからは森寛斎に師事した。明治十三年（一八八〇）には京都府画学校の出仕を拝命し、一方で山元春挙を門弟に持って指導したことでも知られる。村瀬玉田と同じく文挙もまた、明治十九年には京都から東京へ移住し、東京画壇の中で円山派の新たな展開を探ることとなる。明治二十二年からは学習院で教鞭を執り、ご在学の皇太子（大正天皇）にも絵を教えられた。

本図は文挙の画風の特徴がよく表れた作品である。渓流を挟んでそびえる切り立った岩場は、師寛斎ゆずりの力強い描線や筆の腹を使った皴法などでその険しい岩肌が表現されている。一方でこの峻険さを中和するように、岩山からは満開の桜や常緑の松が姿をのぞかせている。これらの樹木はところどころ霞に隠れ、また滲んでその形を曖昧にする。そして、さっと縦に走る刷毛目が渓谷に降り注ぐ雨を表現している。文挙がはじめに学んだ塩川文麟もこうした潤いのある画面作りを得意とし、文挙が文麟と寛斎ふたりの師から学んだ描法を見事に融合していることがわかる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 ―円山派の伝統と発展
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections